■ 本調査の特徴

この調査の特徴は以下のようにまとめられます。

①時代による変化がわかる。

時系列で調査することを目的として企画されており、調査項目は毎回の調査で使用できるよう配慮している。本報告書では6年前と比較して、子どもたちの学習の実態がどう変わったのか（あるいは変わらなかったのか）という点に触れている。

②小・中・高校の学習実態が比較できる。

小・中・高校という学校間でも時系列の変化が把握できるよう、共通の調査項目を設定している。

※報告書は小学生版・中学生版・高校生版の3冊に分かれています。小・中・高校の変化については各報告書に共通版（第3章）を掲載しています。

③幅広い学習実態が把握できる。

学習の好き嫌い、学習行動、学習方法といった表面的な事象にとどまらず、学習への姿勢、環境、日常生活の中での学習といった、幅広い意味での学習の実態を把握できる。

④調査対象の選定に配慮している。

日本の児童・生徒の調査結果となるべく調査校を大都市、地方都市、郡部の3地域から選定した。対象学年は、もっとも安定していると思われる小5、中2、高2を選んだ。高校に関しては、進学状況による特徴を探れるような対象校を選定した。

これらの特徴を念頭において調査結果を分析し、この報告書にまとめました。ぜひご一読いただき、今後の調査・研究等にご活用いただければ幸いに存じます。また、調査に関するご意見・ご質問などございましたら、下記までご連絡ください。

〈お問い合わせ先〉
〒206　多摩市落合1-34　ベネッセ教育研究所　担当　川上道子
ＴＥＬ．0423-56-0840／ＦＡＸ．0423-56-7302

■ 調査概要

1．調査テーマ　高校生の学習に関する意識・実態調査
2．調査方法　学校通しの質問紙による自記式調査
3．調査時期　1996年5月～6月
4．調査地域　全国4地区（東京23区内、東北、中四国、九州）の都市部と郡部
5．調査対象　公立普通科高校2年生2,615名

第1回の調査対象へ再度依頼したため、進学状況による属性区分も第1回のものをそのまま使用した。よって、現在の進学状況とは多少異なる場合がある。

第1回の進学状況による属性区分は下記の通り（1990年3月実績）

1．超進学校　国立大学合格者200名以上のうち東大,京大合格者10名以上
2．進学校　国立大学合格者100名以上
3．準進学校　国立大学合格者10名以上
4．就職進学校　上記以外

6．調査項目

①高校生の学習行動

学校の授業／家での勉強／学習塾・予備校・家庭教師・通信教育の利用状況／勉強の仕方／学習関連行動

②高校生の学習観・成績観

成績の自己評価／よい成績をとるために必要なこと／勉強の効用／勉強していてうれしいと思うとき／学習上の悩み／進学希望／将来つきたい職業／メディアの利用状況など。

※調査テーマ・方法・対象（調査校）・項目は第1回とほぼ同じ。
ただし、調査項目は時代の変化に合わせて多少追加・削除している。

〈有効回収数〉

（人）

	性別			高校属性				合計
	男子	女子	無答・不明	A 超進学校	B 進学校	C 準進学校	D 就職進学校	
東京	266	264	5	81	0	304	150	535
東北	647	371	1	394	88	304	233	1019
中四国	304	350	0	79	43	186	346	654
九州	211	195	1	98	178	131	0	407
合計	1428	1180	7	652	309	925	729	2615